

## 第 1 講：7 「真心の御供」

この「真心の御供」のお話から先ず読み取れることは、「教祖は千里眼で何事も見抜き見通しである」ということです。裕福な家の人は余った餅を、貧しい家の人はお初の餅を持って来た。そのどちらの家の中も見えていないのに、教祖にはそのことが分っておられたということです。

『天理教教典』に、

「親神は、これらの心遣いをあわれと思召され、身上や事情の上に、しるしを見せて、心のほこりを払う節となし、人々を陽気ぐらしへと導かれる。」（68 頁）

とあるように、私たちの身の上に起きてくることは偶然の結果ではなく、親神様が、我々人間一人ひとりの心遣い・行いを見定めて、それぞれの身上や事情にしるしを見せられます。

このことは、道の信仰をするものなら誰でも知っていることですが、しかし、常にそれをはっきりと認識して通っているかという、なかなかそうではないと思います。そして、これは私だけの感覚ではないと思うのですが、「親神様が見抜き見通しだ」と言うより「教祖が見抜き見通しだ」と言われた方が、身近にと申しますか、現実感をもって感じられるのではないかと思うのです。

つまり、「目に見えないが神様は見抜き見通しだ」ということを、「教祖は見抜き見通しだった」という実際の場面での話を通して分かって頂く。それがこの逸話を讀ませて頂く一つの値打ちだろうと思います。

そして、さらに申せば、この逸話篇は、“神様に見られているから姿勢を正せ”という、人間の悪行を戒めることよりも、“神様は真心を見抜き見通しで受け取ってくださる”という、善行を奨励するところに力点をおいて読むべきだと思います。「教祖は人間の不実には厳しいぞ」というよりも、「たとえ粗末なものでも、精一杯の真実がこもっていれば、親心一杯にお受け取りくださる」という点を強調する読み方が、大事ではないかと思うのです。

さて、次にこの逸話から読み取るべきことは、「親神様に供えるのは初物でなくてはいけない。」ということです。

この「真心の御供」というお話の中では、「教祖は物より心を受け取られる」ということに一番の力点がおかれているようにも思えます。しかし、親神様に供える物そのものが、初物でなくてはいけないということは、逸話篇 89 の「食べ残しの甘酒」の話や、教祖のお世話をしていた乾やすに仰ったと伝えられる「神さまに、ものを差し上げるのに、人間が味見をしたらあかんで」というお言葉からも明らかなのです。

（高野友治『教祖余話』27～28 頁）

神様に初物を御供えすると、「神様が毒味をして、親心を添えて人間にお下げくださる」ということであり、人間が先に味見やつまみ食いをすれば、「神様より人間の理、人間の判断が先行することになるからいけない」ということなのです。

そして、この「真心の御供」から学ぶ3つ目の事柄は、親神様に供えられた品物よりも、それを供える人の心の有り様が問題だということです。神様への御供は、日々の御守護への御礼であるべきで、人間からのプレゼントであってはならない。御

供はさせて頂くものであって、施すものではないということなのです。

突き詰めた言い方をすれば、御供をするのは、いのちの対価を差し出すということです。「真心の御供」というお話でも、貧しい人は、“やっとな越しができた”と、いのちを1年繋いで頂いたお礼を持ってきた。しかし、金持ちの人にはそんな思いはなく、お裾分けのような気持ちで持ってきた。“いのちがけ”ではないから、神様に真にお喜び頂くことにはならなかったのです。

さらに申せば、真心の御供とは、逸話篇 178 の「身上がもとや」にもあるように、「二の切り—いのちの次に大事なものを」を出すことですが、それは必ずしも金銭を出すだけのものではありません。金銭より、時間の方が大事な人、地位や名誉の方が大事な人、家族の団欒の方が大事な人、そういう人は、時間、地位、名誉、家族の団欒を供えて神様の御用に使うことが、「二の切り」を出すことになるのです。

こういう話を進めてきますと、“心が伴わないのなら出さない方がよい”とか、“心に納得がいつてから御供をするべきだ”などと考える人も出てくるかも知れません。しかし、御供は生かされていることへの報恩、いのちの代価なのですから、誰もが必ず出すべきものなのです。

「嫌々でも出すべきか」という問いに対して、東中央大教会初代会長の柏木庫治先生は、「出す方は嫌々でも、受け取る会長が喜んで受け取って、その会長が喜び心を添えて神様に御供えしてくれるから、嫌々でも出したらいいいんだ」と言われています。喜び心を会長さんに添えてもらって御供をすれば、それは教会の御用、世界だすけの御用につながるのですから、本人は嫌々でも出さないより出した方がよい。会長さんの喜ぶ顔を見て嫌々ながらも出しているうちに、だんだんと自分も喜んで出せるようになるのです。

しかし、もちろん、折角出すのであれば、喜んで出す方が望ましいし、初物を御供えする方がよい。例えば、月給をもらった時に、家賃はいくら、光熱費はいくら、食費はいくらと必要経費を取ってから、“今月はこれだけ御供えできる”などと計算するのではなく、先ず神様に御供の分はこれだと包んでから、家賃、光熱費、食費と分けていく。その結果として出す額が同じになったとしても、初物と残り物とでは“神様のお受け取りくださる方が違う”ということは「真心の御供」で教えられている通りなのです。

